近世畸人傳

二

和書門

類	號	函	架	冊
	一六〇〇一	一四六	一〇	一〇

内閣文庫

類	號	冊	函
和書	一六〇〇一	一〇	一五八

内閣文庫

番號	和 16001	
冊數	10 (7)	
函號	158	150

国立公文書館
National Archives of Japan

續近世畸人傳巻之二

里村紹巴

宮内省圖書寮
東京帝國圖書館
文庫
町田久成獻納之章

里村紹巴は此は松井氏。初めて興福寺中院院の僧侶なりしが。たゞいやきこゝろ志ありて。出家して天下にたゝんと願ひ。時に関白藤原の時宗乃僧ありてゐる。南都よりきたりて連歌をとゝまるがゆゑにそれをねむごろにもてなす。紹巴はかねてより。名を天下にたゝんとねがひ。紹巴はかねてより。名を天下にあまねしめんと願ひ。紹巴は連歌師大東正云に学ひ。はじめ関白藤原の時宗の家に出入して。はじめて。そ乃枝葉にいたり王侯士庶これ師とあがめたゝ。名を天下にあまねしめんと願ひ。紹巴は連歌師に出入して。紹巴と名を齊しうして。松井の氏をたゝんとおもひたゝ

ぶの里村と聞こえん。又陰に祈の号は三條西構名院殿乃
法号なり公の御深草臨に御の三字を以て天竜寺の某長
史乃法号南都より付おるくなり。ちくねは指よりそれ
ゆえなり。明智光秀本能寺に押し寄せ事ありしに御
信忠の御子宮内卿法眼誉れ接殊うされば
南溟陽光院の宮後陽成院の御父御即位の小沈乃御新とかりて
城内へ入うつる。陽光院宮い禁中へ逃させ給ふ。事急なれば
京無そうく。ふ沈はいとうく出さ給へ。御も紹巴を門とる。
やがて自無とくるりもとよりしうべみ貴そしては作法を
賜ふ。恩に御ものくは。やがて法服をぬぎてい
先とんて節とうに乃子豊御をけうこんせとふ御いく
法橋よ。御そうる。豊太閤乃時よりもくて。法眼号とかしりそ名

手ゆくうー。故法の内にもう者七人紹巴千二人宮と大炊御門
殿りの京南ふ殿へ入り紹巴町といへ大炊御門は宮殿御所と
花頭はなり。後光次乃御うるがあふ。紹巴と号り。三年ちふ。
花頭は云三井寺中院寺ことをとるこ。
うられく業と聞り。ふ法之其の盡寿深よる。ふ法乃紹
毎い云仲の也女ろれば千宗旦と云ふ。
見と無と号くよきけうこんちれば
のも老て宗旦ととりて法ー。大宗ちふ法義法師ちふん
わ法りへういくるび法と号てもうえ法ふ宗紹巴の脇師名なり

いとくちをしくこそ。されば、後宮業平も、ものの筆
のしたとかれど。深金とくさはるを、ひとの遠い稚れ流
ふ。そのうりかぎは、墨は行ることはなきに、
さらへしてはは得力法きくうくけ。はのいとふ。思考。
はの毋、道場をきはは法鬼二条の毋まれ。辻切のかれ。
ふくれとふ田ひとつ。ひとつ。南慶美ふ。
ゆとらーも。ゆくくこ。或は太閤の氏義ふ。
ひ。ゆくふにうとくとくくはうを。張紙
ふるせ。ゆくに。紙色部を掘て。は匂ふ。
て。手もたづし。宮れくくはとはとよまくく
て筆ととくこ。ひも。ふと。筆ふ。
ゆくとゆくれどいふも。匂ふくくくこ。

序詞とかくものは四段のたにるくふ。
手ひとと。玄者は下。はは者ふ。
序にも。ゆ。集ふ。むけのこのとは
かくくもくくくくくは句ふ。
くれはくくくくくふ紙色もくくくくくは
はまり。ふくを。孝のはくくくくくは
けくくはばくくふけり。何の集ふ人の
ゆ。ふくくくくくは義ふくくは。
ゆくくくはいくくはくくは。
くくはけはくくくくくくくくは。
しはくは。はくくは。或はくくは

きて前ぐ所りしいの句と作られ。紙巴二三遍流れ
して。ふつふと非ぬ乃作句くして。情弟にてきりの分
まげ。で紙巴が形を作られ。雲ハるうぐりし。百会の
くなりしてしてく作文ば。紙巴くるくき倒もい。基法
和尚ようずづ子よりねさうくて作られしてりくれば。
不斜無ぐ所りし。紙巴いりこれるくと作るぐぐの
こ手うに撫ぜの付。貞法義ようしてひねれる
沈りつ

こが和しぐ色しせもて彩るけぐるまるまれ代ぐて来るうた
とうしく刑まし。その駕るを光りくるくしし。
沒撫ぐるる。慶長五年くぐ。人はる年四月沈義より

本阿弥光悦

本阿弥光悦者鹿庵乃自徳齋法名者也。本
姓木の氏族多賀豐後守高定の孫。作品法文
宗春乃三男なり。母ハ本阿弥氏妙秀。ハ刀鑑定磨礪洗拭
の三事を以ぞ。これとあら弥
ちする不乃洗拭を毒。　　みなるの三
一ふりからいのぐひ一ちりかきまのれり
人の力と相ちは白ものぐ。むぐ書ふのぐ。ぐるた
道術三霊院殿光悦ようづねまぐ天ぐに徒書ちて
い作ちるぐ。光悦ちんぐて次ハ書。次ハ八幡の坊く
杉長ぐ。藤ぐるの先ぐよ詩ぐ作まった。沿なぐ私
ふりしぐ。けはのこ筆天下に名ぐり。我ハ家田夫

尊純法親王と筆をならべ四筆とまでいふ。藤公以下
三人へても。我ハ法親王の流れを汲むといへども實管に及
なれば。ゆゑに光悦は藤公にならびて光悦とのみ呼れば。何事も
ざりしかれども学ぶといへども及ばず。悦が筆を見るや
そのせ給ひし。依ていよいよ。筆も皆ちからぬ作をなす。悦が云ひ
ようになりけれバ。御意をかうむりし。光悦の符合も。光悦
くるしからぬ。玄斎ゆるし給ひし。何にしても図らず書
きしにて。筆意をまなびしもあり。又松華堂もならひて藤公へ
ゆかり。其乃ふるきを御物にて伝へせし時。今古の書
家と云ふ事なし。内孫道遠庭。豊世間にしられし王右軍
と学ふといへども。不似ましし。今人ハその風を学んでをろ
心ともなれバ。その筆を書得る事を書ぬものゝ名を

深く好むハ。皆のく我ぬしにゆるせし。一家を成べしやと
書事ハ。二子僕ごとも常に思ひ侍るなり。されどもなほ
書を好みておもへらく熟ざれバとて何ぞね。術の上手ハ
ただ二子にかぎり。此御筆になすべし。おのく一風を書分けし
と云ふべかる。今も近衛流光悦流瀧本流とし学ぶ
人やさる。又其をぬきて。私に定まりて善し。後世宮推文よ
論高きしれしは。すくなく光悦が手の書をまなぶれば。ひとつに
野間玄澤 鷹峰の隠者 にて。よく当たるを。且其出て深くす。其と
ちかしハ何の為なるらん。まさに陶器をなして焼ぬると聞
するはなしての事なりけん。凡蒔絵の事なれバ。紹済の手もありて
鷹峰のうちに金沢へ又山を考へてさまと作る。人民多
その業を成る。すべてかかるが世にしよく人あまりかかりし。

其の一事は、七月ばかりにある町家へ行けるに、先に何がし
家蔵とてよき物かけりしが。悦みやりて。これは先人の筆なる
金泥の出来常しく見え。なにぞかく清ねよかるぞや
といふに、あるじ町家の柄事をかたるとしかし。何となく今より
外よりものを見れるに。これ行中の所を作るはしきかな
も出がたのぞんいふもかくもありしに悦にとえ也。其の
用いてのどかにまりしを
北寄院と悦より
義経母常の母
なりしもの艶よりき
人を花と

る。寿八十歳。光悦が子のあとをつぐ
図に云。光悦生子なし。光瑳は養子なり。其の子
光甫は空中斎と号し、法眼に叙す。家にて三事
にすぐれしこと光悦に劣らず。茶をも能くす。子
十八人あり。寿は八十歳の後までかくれし。天和二年
壬戌七月廿四日、八十七歳にて卒せり
嵩蹊云。此伝人のきゝおよべるもあり。花顔よく写
せり。其一事も加ふるに及ばず。文章のおほ
を錯綜するのみ

岡野左内

岡野左内は、蒲生氏郷の侍、奥州にありて一万石を領じ。
越後守といふ。其の武功も世に知る軍記等に見えたる中にも。けふ

と仕意顔にて一封ずつ。授くる中の陣羽織に二所ものの
銀の袋はけしとぞ。如何の仕業なるべき。爰ぞ奇なる事
なり。彼陣羽織と称するものは。ものの上に掛たるものなり。
けく毒ひるよ猛者とぞいふ。武士の場所の中間は黄金をもて
ちらすものなりとぞ。しかるに青侯嘉して。黄金
十枚とらせ給へ。武士も金しかるべしと申ふるべし。凡
いつくにあるは八金をもちて遊べ。その子ふ孫ながらの
きく人ぞ武士の道なるべしとぞいふなるべし。
あはれけるものとぞ。なるべし。銀子八海と結びたるとぞ
ちりぬべきなる金八つのきれたちる。貞之の太刀と号し
麗もろる馬を駿しらくまり。一日二度のちさはぐ。
ひうざうぞ。ものしぬ。そ間い金のるはあるい出ぬ

くもきるひとびとはとうとくいらふまどろおそろしくなんぞ
軍陣に臨んでは必ず役者とやねめ〳〵紀家とそそ
こねいつく就びんくそのねをそこへば辛はハくられくもぬしん
ひうもていくるうし。軍法のしるしいそれ
ちうけるうふ。ひうやうれわるそびとうりうん。おのれはほに
出陣のまことと偽れいくるあり。紀家者もようといくるうれば
これとそくくくくくとこいうりぞ。百の沈のまおこ。ひこ沈

る松源八

る松源八は出雲れ家士新蔵の師く。考くふ出ぶん
長久方正法朴比ぶそう。若ひれはその過失ふ連中ちて
猟と鄙と。国内大系郡に鷲ふし。お貧ふれは鷹
衣食と給ふ。それ在宅の法に農業ふ。源八

業とひふ比るそれば。それよ物でふ物ると嘆ふとふよ。ぶんまして
ひとうりうんりはりくといふ。くはくれとうあんたく物のく
くくえ力ふくとて償とうけどももりは源八ふるとふん
とうはけてえ償とうの堂よ結ばて去。国をふふ
法のひりとんくあやうけ。けくのふるなんとれ物て・ふも
国、物てうけそ。富民の家内皆他よ通くくあるはは。源八
ひ国うくくれはるくと託せるにられふ出ひび。ふ法ると引る
ち。家の中央よ座し。儀よう先を長。八方に服を脱りて裸者
膳くはぷ。ふうるの村中牡丹のあ出産せ。源八はくぷ。つねぐ
ふくとうるよ来他よ。ふれくいくくくはは、夜他よこく
物れくはは長い物くくくて。皆出産せくくくく。僕
越膳よ及ぶ源八ふ。猫り産婦の前よ端中。通者とと

国立公文書館
National Archives of Japan

と出て又まかりて二銭目ほど費ぬるなりしかば又是とかへさんといふ
ことなれ人々は顔いたづらにして菓子も價を下さんとて遣し。
我人は無所なれば費へ無を惜まし八箇なれば久しく又商人も是と借く
三日にぶつ家にては價と二分ある事にしたる事ぞまなば使る女婢も
手習は仕して僕折して詰らねば其こそ使われしものにいふなる
人多くして衣抱あり。年八十に至て愛して眼力衰へ胸とさるし内
まることなし。村時は内人側にありて二寸ほど上下あり三寸下ほどあり
けるを若菜は従ひて先を教ては必ずわけなりむ後なるはめぐらし
中ねばつゝ先を按じ。吾老たりたる八君が思ふも益もなくて益なしや。
遂に食さかんとして其内人実ずるも不食。其内人は二合ほど菜すこし又
國が老あり。吾をせさて渋く自衛し。箸とれて諭せば深く拝せざれ
一に納め二にかゝる程も吐くを無病食と不食すぞ。遂に不食して終ぬ

子田長寿説

原田ちゝ某は初め但馬豊岡侯の臣なりしが。致仕して後は細溝に
すむ京庵したり。為人正直にして人の欺言もなる事をもしたれば
門人多し。我村中に百歳に近き老人あり。其村の井戸の井に清き枸杞の
木あり。其井の水はことに水とかはれり。其木実の赤く面白かりしが
多く生ず。此井を守となり。其身も老となりけり。井の水は白くなりて
枸杞と云その根と掘て顔にそゝぐ事をしてのまれ。枸杞の根ぞ
生ておれ所にそゝぐべき者らないそれは必ずや事もなれども八旬に
及ぶ者い從曜躁なりし。壮年におよびとはじめとして門人多く六
十九におよびいつまで八十八の齢におよびたるよし。是は枸杞とさうして
楽しを語りいつまでそれをなかなかおぼえなれなば皆よろこびて
思へすと前生の宿因なるにより拙それば我等此世にもあるを

法華の経をぬすんでしられたる事
なれば天の罰をかうむりたる也。又ひとりあるよしにて
実説とてもかの清原なりとぞ。されつつ
ひとりもとりわけ〳〵いつけ〳〵ぞ。ちゑ
深きれども其ものにそれべとせんとぬく使ひたるふるそ
たるにて伊勢の守に出ぬ。くまよ向ぬ。けぐ〳〵。
あまれ猿よ猫とつまく。おのれ〳〵たれ。大夫とひるのの
美濃のもとに向ぬ。粉とはよひ。をてそ人
ひく所こが。大切ふ。をりそんづひそひやれぬ。ろよ紀ろより
いかあるよに味ものの酒ぬ。生ぬとく〳〵ふ〳〵ぬ。
ぬ。まるもいつも猫にられて内まりにをそん。武術とて
ひとりのんばうひ。ぬり弦をなり

大和郡山八幡宮と名多侯の臣誠実なる平ろへ。雪氣通り人
ろも道にあり。徐々ともぬひ。河徐の術よ。ものひ思ひ
きに書ものの大小力ろも自然。ぬろふ。あると郡八。歩ろ
更ぬ〳〵の方にあるをを。作ひ。ひ付く。松ひにあるる紙と
学びたるふ。猫と指。ぬれとひ。ぬやく。朝よ切ひん。
ろるものをと。はづりそをを。をく。猫とりて面とをるにぬて
只はひ。如之平馬絵。とて回。ぬれふくにやひろ。ひれど
おるいしぬ。ぬへの内へ。ひ。ちへ。まるるんぬ。ぬ。奴が進ふ。
我と切らんとをるや。ひれどをて郡をを〳〵れて面目ろ。ぬる
ろそのをろひるをんぬ。つをひ人て行ひどをのをぬ。ぬの道へゆ
と指へろ〳〵おぬよをるふ米倉の猫。ぬひて。ぬ。ぬれを存る

とうへくう完わりぬ。ぢくさいのあんぽー仙人の為へりさしへ
如命と先づ。ぢくりぬんとなよ。ぢくものそさんぽの元と出て
三ヶ年ぢくせつこけるこてぢくー米食にぐちこふわもとけ
られて。わつしね。紬のかくー。松さたてつさる後のけちー二後引なき
てぬんりさけ。塚ぢふ投ー。それりちてくりとひてー。
のそりこそ入ぢー寝ると。富の四ろ人ぢー。おめー食も塚も
加ぬさたる元わると。美濃に新ろぢ。ぢくたぢー。わらしぢくりぢ
ふつげられぢんぢよりこてるこんぢの他に所りとこねー
ぢ。此一事もて天人ぢーかくぢくえる。こんそ細術の四人
四ぢ年の法人行村押四ぢのぢりろりよ

杉山検校

杉山検校は遠江浜松の人ぢ。生まれて聾者なれり。
世盲聾ふてれるこに眼い高ちいても。ぐんと天下に名ん
こと称り。十七歳の時鎌倉ふ。ぢりの出ぢ入て勤仕し
ぢること三ヶ年。母滅れれるに。ぢりれば浪子来の美に嫌ー。ぢくと
ぢくこりこりぢくぢのおまに京中ふ。ぢりぢくこりぢく。
諸侯ちのれを遊で。病と金ぢくこぢくー也ぢ不　大表の民
と業り。ぢくに術ぢはぢくに。表ぢはぢくりぢりの術命
ぢれぢ。ぢ事ぢりせぢあれば月ぢふれ
くこりれは。ぢくこんぢ結ぢるぢ表ぢり。ぢい就ぢなぢ表ぢ
ぢりぢ。ぢ法ぢ一ぢ月ぢ一ぢ一所四ぢぢりぢ又百石技ぢ行ぢ
四ぢぢるぢ無ぢさぢぢ。ぢぢりぢ又ぢ百石術ぢ過ぢり。検
技ぢ職ぢ任ぢ。ぢ。ぢも僧録ぢ。ぢ
又つねぢ觀ぢまぢと伝ぢ。業越ともぢ。ぢ。ぢよ盲ぢと技ぢ

ありし。流風の青光皆その道を学びぬ。京師に清荒庵乃光悦と
聞ゆるものと並び角倉素庵乃南に諸光一流乃規矩をもて中興す
京の人もまた本阿弥と出羽を並べ世に法を伝ふ。然るに
元禄七年甲戌六月に至りて子孫絶して家を継ぐものなし

角倉了以　并息玄之

光好姓は源。氏は吉田。後に角倉と改む。小字を与七といへり。
後了以と号す。家系羅山の作碑文に載たり。母は中村氏。天文二十三年甲寅
に生る。天性工役に長ず。慶長九年甲辰京に来。事によりて美
作国に至り和計川の艜船を見て。百川皆舟を行るべしと云ひ
京に帰りて従事に告ぐ。大堰川を浚へて。丹波国保津に至るは
嶮しく岩多くして行がたき所なり。是舟をとほすに
翌乙巳家康公に言上し許を得て事をはじむ。是を毛くしたるに

二州乃幸なるべしと許されて。明年丙午
春三月より大堰川を浚ふ。其大石は轆轤索をもて曳く
水中にある石は鉄棒の長さ三尺。柄の長さ二丈なるを以て索を結付。数
十人にて是を挽き上げ打ちかけて。石を碎き砕く。
又石の水面に出たるは。火を以て焼て碎く。又深き所は
広く其水浅く石と瀬と除く。又深き所は
浅くなして平らかにしつらへて八月に至りて成就す。
かくして丹波世木村より嵯峨に舟をかよはしめて
五穀塩鉄材木その外多く運ぶ。民大に利をうけたり。
十二年丁未又命を奉じて駿河の国富士川を浚へ。此川はもと
険流なれども。駿河の岩淵より甲斐の国に舟をかよはしむ

なりぬ。ちかころこの人々艜をこしらへかつ溝ほりて、
奥よりくだしてのぼれども。然れば諸人の舟こゝにあつまりて往来ふにかなへり。又
十三年信濃の天竜川をほりて、筋をも遠江の国掛塚まで
舟をかよはしめんと、所々へ奉行をつかはせども、さかしくて渡流る
まべからねば、ほどなくやみにけりとぞ。此年洛東に大仏殿造立ありけり。大
木巨石を運ぶ事甚だやすからず。しかるに了以又はじめて伏見の里
よりいかに掘て運送す。元来伏見のうちなり。大仏の基より
五条まで半六丁あまりとて、そのほどかゝるまで車とめぐりて
ひらく所に流とつけて、又川のかくなる所に轆轤索をとりて見
とふくまでせらるべく、不日にして木石こと〴〵く至りけり。その人々
おしまずからへぬるよしとなん。十六年又宮まで淀の鴨川は
私を兼たる今の高瀬川是なり。十九年先にさく〳〵し富士川築

て、私の所をひらきやりわたりべきことを以て、一らにおよび行かば病に出て
ありしかば、息玄之としていふ。三月より後と称して七月に帰洛。何とも
了以病いえず、やまひもつてとも子につたへけるにや、いつゝにいだくれる
五十二日に没せり。慶長十九年甲寅七月十二日也。享年六十一歳
此の里嵯峨に大悲閣と建立しぬ。死に臨む時遺言してける。
我か像を作り大悲閣の側に安せよ。臣綱とあるをたてし。
神其をとも鉄をもつて石誌と建てよ。後に遺教のことをうけて碑文
を羅山林氏にこふて建つ。その銘にいはく

排巨川兮舟楫通。浮鴨水兮梁如虹。剔復
鑿富士河兮有成功。慕其賜主兮。笑破
化黄熊嵐山之上兮名不朽而無窮。
寛永六年冬十一月日

此一條所の林先生の伝文にも一二とりて深き
猶の弱誌なるべし。深くしるべし。
因云。是古之一の名人貞順。毎朝夕一部。法華経
捏寓とをとふとぐいとぎにもぜり。きふ涼衣と著
して儒書と渡をりとめん。所以氏しまふ。かんの所
時捏寓をとふをとをも。此人の紀伝なりとも

能順

能順八海小路の住人。連歌ふもどせる指学人。
貞享帝 ちく 是年の題せるの行脚 御歌 御歌をとりて
御歌と揚る。それ所ふをもる句。

じくさしるの一筆のうをとりをとり
その後如此の人字の指よ毎ルポ杖杖流といふを

行りその法をもの桃青の行脚ふ

杖ついの落吹しくもとるる郡
とて能順乃句とをとりねられてとり。紀行脚
句集よる。京水三よ西成十月九日。七十九年にて終り

村上等銓

村上等銓の平安之除池小沼より雲と以業とし十六
年にしく
東山院の宮よれ御急病より御と奉し御衣と拾上。後
に京に帰し。春嘉院の三字の宸筆と賜ふ。御製とか
ろ。をとふ杖杖ありとぞ。杖といふ杖とも
思考御ようとをとを御製とは
御製の杖杖とひく能亜帝ちが。家住るをとうをめ

[illegible]。山[illegible]の大膳[illegible]貪[illegible]。世[illegible]
の石[illegible]。そ[illegible]面白[illegible]
[illegible]。備前の[illegible]
乃函[illegible]。寝[illegible]
[illegible]。御[illegible]
[illegible]。[illegible]
と[illegible]。[illegible]
馬[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

葛溪[illegible]。[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

三播孝貞

三播孝貞字[illegible]の[illegible]。[illegible]
科[illegible]。[illegible]
播[illegible]。[illegible]
為人[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
親切著明[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

これまでかとおもひしに。さにあらず是とおもうて与へられきう
うらに唐学をするものをみすてられど。則霸者のさとりにする
能ありとおもうていつでも天道にあらば。又義襲して是を
するのみ。其敗をみんとはかりして気をさいめんとて。事よし
物よしに道理とあるは。聞者はさりとて大方にして物を
探るがめづらしくありなんといへども。朝は自得の学ふ
あらばし。却て人欲の満出あり。人欲の私慾をとめ
寃抑措置して。意必固我をしらず。ある学ぶべき諸
生は大やう常に人の非あり。是を考る所は。流れぬも
又ひがめる由さへ多し。如何となれば天欲の人欲之欲を
除まず。人欲節くなんを害する者そ不多乎。
中ても大敵にあれる臣隣之大欲外欲なきなりをとがめて
さるにあまりぬれば。其私なる己が欲をとどめ何ぞんずる

きはぶたく人をとらえしむ。あれは天人をはなはだおぼつかなきそれば
あれはさきをのれが欲をとめて自らよりて人をとらふるは
たとへば食は民命をとゞむれて一日もなきなれば死すとい
へども食ふ傷むれ人。又食毒とさり。傷食と補ひて
これは食をとするもれがかてて病を助ける民命ちかる
あらんとするがごとし。下略

其学は洲の大儒とよんでし。著述の書は易学記
二冊 日用の法一冊 堯典私釈一冊 四言教解一冊 傳習録
解三冊 雑著四冊 救餘法一冊 ほかに答等あり。此れ
さる人難きて。老儒後非ありといへども。それあて義なる。此所は
ありやさるべし。又不奇とみゆる儒者の間にもあれ奇なる
人はあれなるべし。雑著の中に言教のうちに。ことごとく

是也。此言ハ陽明先生の説也

無善無悪心之體

りかも何かさらんよりも明らかなる事とこそ思へのふへらず

有善有悪意之動

きこゆるやうてはしたかふての傳へよりおのつから知れるもの也ん

知善知悪是良知

ふるれうけいわかるり經傳に見そこ兆ふるるれ乃語ふ

為善去悪是格物

うとより△と別なべつの名ふれよまふてハ高ましき儀

とこれハなかての蒼氏にもよき出てり解むかけれぞ。此外くとくべし

多くしける加養のこと

ほのぐしと朱子加之説よりととぞそう与えよはさらふ乃わ

此あうちれ和文ハ遊ひ候る事をまべく難しきひとらべされば

遊ぶうへとは仰くんでぐ。俳よ之へきぞことにと仍ぞとれゝる

そんいろくれ乃くさちへ證へど。ぐふも詞るそれバざかへくるし

ゝじとのくちぞりしをぞ　書讀玄此和文と遊ぶハ此世のことゝ。作りつくしよりれたるのうちを悟るとぞうつされ

さも恐れ此和文のことをいうてと一心ぎりとふうよだ、又よるる也。

こゝ猶くむ花が信家とてゝと三れ門ふ三ーれ松ハ出てるも

三猶の段ふよゝま家の者も、ての名弁の和くぞ。それと老の

法ふそれ乃は止るも無心。是仁の中むし読よ先人乃

墓へあれハ七十一の時ぶつゝれ墓とも誌さ。自筆ふてそを入め

すゝれまねらるれし。

先塋の後にをが經の傳へ来くゝりだ。書不授の

二ゲもをけるもたゞふゝだ先づそれバ

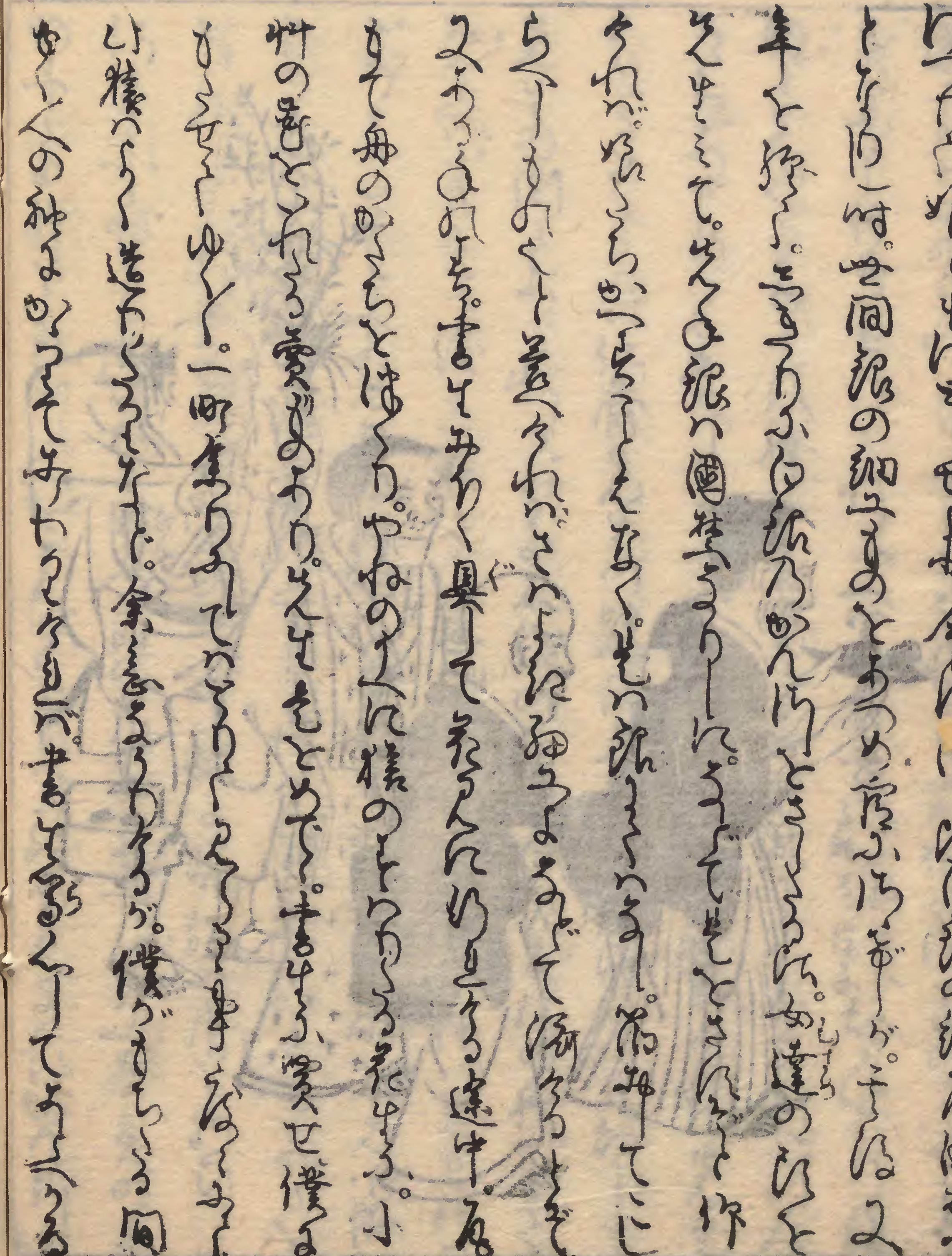
たらちねよりつゝけ男をおまつされ共今をとゞる枝の二本
更みくゐ形ありぬと書つけ与よりハいつくのちもちるとも
元文四年冬　　希賢七十一歳書
後又手を経て寛保四年甲子正月の吉日に殺をとま
年七十六にして終ハ此人ありしと大なる笑ひを翻む。著
述ハ多からず。雑著中養子の辨似辨ずろより仮名書
の書あり。一己の見識とおもハさる。吾子に伝ふ似
翻しむすもこれなるし　養子辨ハおよそ儒を暮とするて化性と翻しとすむ。されとも辨
もちれたるが身毎のこゝろむ
国ノ悦をも。此義も先の術を書きて来
られしく開本なるありしのなかは後蘭郁
一乗院宮へ来られし時端かし御前

御の雪然乃ものめはいさゝれ見へぬになるの云々
御もしあけがうきへらて止られと歎人かうける

松岡恕庵　附稲若水

恕庵ハ京都の人。字ハ成章。はじめ…乃
神道を学ひてハ真然湖翁をもいて。年あの人ぞ先ハ尾
張名護屋なる。浅井図南よりハ居先生とす本草者かり
おらず。儒者これども。詩歌の名物を翻しぬ。端を若れよき
ひとなむとし遍く知りしが。大方情悦で。何ぞ浅藤き
ら逃ぬでいさる本草者おれども。さなよ人さりよ
本草をこひ知よむ業しまりしるも。そゞ志よおるげで。博
覧好古倹約き淳朴の人なるよし人のさる居しぞ。今千しき年さる
二三除と暮ぐ。大きなる食を二つしまく。一つハ漢の書。一つハ

国主をとそなられしちかのこと
ものよりはりまちわれ。ぞ。大相へ京まのとやきと
のくろいとこんをんぞ。稽古長長永い典をい
たらぞおまわりん長ーそそ。ぞうしよ稽とと迷わりわれ。生を
もとんそ。ぞれに齋先をの海岸ふもはふ海いゃぐ初して
えをの側よわこれわ。ぞよ本郷の布ぞ。白紙本郷の稽くぞと
やしぺ。長長い波を。ぞくこと。ものこさ稽く長せ行い
ぐりここそ。ぞこのはぬ償とをいく。端午の節とえ白
こ。を。い長。これい出よ。ぞ。せとわこちとしこのくこちわこと
皆おくしこれをとぞこつのく。今如ま端午の菖と行ちいく
いうまふくやし同ぞんを賢うけのえくと言ってこうの菖天の木
のこよ軒とえをしぞくとこ。ぞもいぞれ菖天をえぞのんげま



けづりさへ婦人もにこそせしもて。今ハ山紙の細な酒井
となりけり。世間紙の細工ものとあつめ置かれ〳〵ば。これ又
年を経るにまゝりふり紙乃めんけいとさけられ。女達の紙を
そまそて。先く紙ハ酒井まゐりしれ。されどもとさんで作
それバ婦人ちか。ゆづりまふしえもなく。先ハ紙まゐります。第ありてこし
らへしもありへく蓋へられバさんよれ細工つよふみずで添るよき。
又おつくのれよちや。書をみかく具して気をうんれりまゐる途中。店
まて舟のかこちとはこり。やねのまんに猿のとりかゝる花ありふ。小
竹の台とされる覚がおのわりやちえもとめて。書けるふ寄せ僕る
ものそしゆへし。一町まりありて。かまりとへそりしまゝ年なくふそて
小猿へちく造りゐれたち。余ゑまるわりそるが。僕がましちつる間
むく人の神をかゝつてみわりとなくまバ書をうへくしてふう〳〵へいゐる

蜀漢の斉伝ふ〳〵
「三国志なるくろこう
ろるを猿ふ打ちの
るそとするの学る
然をまて猿と遊
猿し国となりし本
下勢力でなれバ
も皆兵まもすく
兵れ付て勢るを
学ハ本ゝの僕まで

してふう〳〵れすまのきせ〳〵るが。けふびハむそのにしく〳〵かゝるまのゐる
くさふやねのまへに猿のかゝるとまうのまはりゐるが。先生まつ又下都が
よわりそりふゝえまかひこれハりるよ。ゆふゆすが。猿ハやねのてふふ拾さる
ふそもハさひたりとある。書をするに彩れせらるれしとで
ひふ。ふゑちぢひゐるしハ待くどよつく〳〵ぞひかれバさふやゝふて。又
店のかゝ〳〵きもしまつて。そゐるすゝそのへ〳〵るりとさらぐし
書法云。紙の斧も猿のちぢひしもえまちつれざるへ
あらしじ。新たなるこゝろ〳〵らぎハ表者の森なるん
固ふそ。猫を兼ねるハ宣家字ハ彰信じ。としの人々ある
其わのを召すれとせしぞも親ハ月哉のありさをも敝風を
見し自力と学られバ〳〵偕者やしむ。先歩ば 各令ありて
詩経と論ぜし時。名ハ本るもの。学ふ神よりへ〳〵りしハ通
してゐれば。さりは本の順あるもかんとよハせられさるとるやを

あれ程されど
にかたるの事は
鹿園に覚ても京
こりて下られ考
其とも隠れし
〻と毎〻しと
子孝ふ凡自之
継いうに及ふ之
てかる考へん
そう被正のゑ
何すれ京都ある
見たつることそ

まゝて鹿あとくろふとか才ありて他の及ぶべくもあらず。加賀の太守より禄二百石を得て、庶西類纂といふ書を撰して、原なる前なるも凡自筆にて書る。其面はいまに官府に収めあり。前なるは加賀にのこれり。惜らくは中年にて又自らも満して逝せり。白石先生もよりて考うりしかば鳩巣又自ら代りて其考の書を編む。人ともなり学ぶもの数多ありしとぞ。蕉績持初管よ説あし此餘著書若干鶉居雑集。抱負令書等世に行はる

三宅石庵

石庵三宅氏。名は正名。字は實父。萬年と号す。平安の人なり。寛文元年正月十九日に生る。兄弟六人あり。中に。其觀瀾(名は緝明字は用晦号は)九十郎。此石庵を学とならぶ。為人沉静倹簡にして英敏青也。

御ちにて家産殆亡し。常に債を負ふて残る金十両ある人にかし。に對ていふ。我が從ふといへども、文学を好まれ是をしり兄弟皆と並べて度合て至る。去れども十両の金を施さけり。くべし。兄弟皆手を携へて京都に遊ぶ。又ある時ふと折しも。其後観瀾を始め自ら京に至れて。彼るに兄弟ともに不足して。又は人を名を募りて来けれども。又国に仕ふるものありしが。又京に在る事四年にて終に浪華に来り住む。学風大に行はる。其間浪花に学ふ。門弟子日にすゝみ。学舎を浪華に営場と称しとけり。閑に読みし。其後の名もかゝ台国にて至りければ。即ち其名を問ふ。学派の説と偏よりて其学を掲すといへども。固辞して行かず。君子不重則不威。こ是は布衣の職まで如何ぞ棟梁たらんや。門弟子其ゆへに改めず

生れもの弱く生まれつき。孫源の教授を受け深くこれを信じ。布衣を
まとい棟梁をつとめ。もっぱらこれを信じ。仏教の道を学んでこれを
奉じ言葉を慎み。謙虚で穏やかなことを好む。年は鷹揚で。ゆったり
三年の喪を深く悲しみ。年七十六。病は癒えず。翌日六十六。酒
肴を絶ち。薬を服さず。布衣をわかち。書い通。勤めて修行
つとめ。今に至りても。くさ後学をとどめ。ものしるべ。
仏法を用いることなし。凡そ貴ぶべきものは。
国歌。俳諧。茶。唐土。ものの。清き。きびしく。
人道の法と。貴き学の道を。他言とせず。
時人は品田助ノ二男二郎と。文学は二郎。
とうとぶ。ものの。二男二郎。
て。漢書堂。今の後の学問。家系の才。
[illegible]

[illegible]小説。はじめ戸後。はるばる。
はるばる。

栗原為濱

名は宗雄。栗原氏。為濱は字。
俳諧。和歌。
分の諸。
自一家と。
[illegible]。
乃山中。
光。
[illegible]。
中。
とせ。

下村道清

道清下村氏より書きて。用法の考とやんごとなき所
ふ。遠くて。盤の和尾保ちみ。ちなびく。ふ。ふ。ふ

又楽府古曲の歌いものふりも作者のこゝろ〻〻作れど
音律を育ふにして。倚声填詞ますます盛なり。其間よ慢ふ〻〻
の流り変調と化り。其聲ふりもよく客況塡詞。為て流の
向きとかゝるもんの函数と下知ゆるわが邦業ふたい考るよの稱
にはいふべき。詩書と和漢書に系とれ双聲を韻とたに
物も歴代を揚り下を平解王化まよりたゝ国風如しそ
ちうれ者に全物にして音ハ此はゆく管絃諸家皆此ゆ
ふ所。こゝ百ふ年清廉の傳文を行ふ
を自ら。近世近体の流ふ平仄とゆるの今まで。けをと
しかいそれば〻〻ふ〻〻と書くこれと事。亭の高流も
ふて大是ふふ。芳説ふ壮のは此者ハ知るを殆尺ふれども
尺ふ文華ふの今ふ絶。ひふる傳家の流ハ写ふも情ふ

と。先生にふ生ふまとゆんて。敢ばは物の想とそじぬ。ふの生
ふ義後ふて生ふまねふ。けを卷ふてふいふ人なふれば
後ふふこれを海と学ふ。後ふを生ふふ〻〻ふんとみもり。

詩家音律凡例小引

八病在五字内謂之急在十字内謂之緩。緩急之度
謂之節奏節奏也者。其作詩之本歟。豈啻詩已。凡百
散文儷文亦皆雙聲疊韻也耳。而今吾邑之士。絶無
講求雙聲疊韻者。余甚惜焉。故著茲編并凡例云。

泰宇下村道瑞謹識

沈約八病也。
平頭　上句第一二字與下句一二字同聲
蜂腰　第二字不得與第五字同聲

上尾　第五字与十字同聲。如青青河畔艸。鬱鬱園中柳是也

鶴膝　第五字不得與第十五字同聲

大韻　如聲鳴為韻。上九字不得用鷺頌平榮字

小韻　除本韻一字外。九字不得兩字同韻。如逢條同韻也

正紐　詩病有正紐傍紐。謂十字內兩字雙聲為正紐

傍紐　若不共一紐而有双聲為傍紐。如流六為正紐流柳為傍紐

奥田之角

伊勢の儒者奥田之角名は士亨字は春甫蘭汀と号す。江戸

古体乃歌よりなりたちし南山の雪と称ふ之角の亭の名みてやしほの俗体より用ひ。小なる京師法華寺といふ。そも遊所豊京より七十伊勢にあり。稀田川の上なる家と。なりそとなる。田園字はよりそひ。表紙蘋洲の門人に出る。ものしるすこと三ぱ。蘋洲告ていふ。学者西国天下第一号のくにはいてはすべ学京師より伊藤東涯より。学ぶ者とくんとやうれ人とうてるし。伊勢にそなぶ学ぶ。ふ学ぶ十九にして。ふ。ふ門の塾ふ。ふ十餘ふ。法門をみて。ふ。ふ。ふ法法よりぶ。ふ。ふ。ふ

られ殘よりてこれ一ぶ。四君の歴仕侯待往よりすべ。正法のね
も羅遇もあり。ゆゑんとなりて。ねとなむつぐられもつれ剖
ゆうてあり屈もび。殺もあるよ往ってのあ嘱ふ。ぶんまれ殺
すぐ。作ふ揚まれ往ぶ。凡こよれ喪ハ人く慶泥。ぶる
士とびも殺ハるこ。ゆうこと。ぶんを言保ひみのくくこ乃
喪ようひ。おこよ師と屈とうくくひん喪と会ゆ毎でひ年。
ゆくく喪とつこゆくれ。ゆ。そこ命操とるるべこもれこ往ぶる
ふ力とまひられハ海ぶ。博冥可強紀もちこんの赤ルわふ。
詩又一家乃作とまたくひこも。こひく振敵と用びくの霜ゆ
立でて立でこうに成。又章ふ外おそいまひんとこでうて事間
紹と書び。一義苟もせど。注うと章こりふ三角筆ゆ異と。
著者鑒別ふ。作ゆ粉出とはふ乃八角ゆ及ぶ粉供ど。

著述ハ一あられまりゆ。ゆ。ゆ。

[illegible]

三角亭記

余嘗於後圃中開試馬場長不及五十弓廣僅可旋馬傍植花卉外鑿芙蕖溝内築小堤偶記俞退翁三角亭詩曰春無四面花夜欠一簷雨同話録花為龍作余仁廓余愛其句深服其意凡天下之花無四時無五色雖有躑躅燕脂四季歲中三開耳余家五色梅分淺深紅足數何索墨梅何貪四面窺思三角之為物則方之半矣缺盈之戒無以加焉因欲倣之構亭於西北隅庶乎不妨旋馬焉有志未果客歲病眼折足不堪騎乘遂放馬徹調馬場鋤為菜圃今[illegible]春晩有人告曰有廢材價不滿一貫文盍安堤上也余心搖焉召二老僕謀之僕曰不用請陪其價可辦矣日亭午此去神山幾里春水方漲編秡乘流二人而足余從之薄暮果致杉材十餘根於門下明日召匠構之曰務存斧鋸痕謹勿施鞏斲不日成之又翌日葺茅至三日落之時三月十二日也揭蓬窗子扁忽官書至飯于亭歸于府他日心常在此亭七月之望歸鄉坐卧亭中仰看青山俯觀紅渠始償平生因為之記云

（此記乃家流三角の亭を記したるなり。一奇事なり）

三角亭詩

桑蟄空負四方志三角亭中夢亦奇忽怪蟲聲開一面深歡月影照多時人間交際重謙損天道循環鑒

滿麓窓自不妨八風至牀頭長掛退翁詩。

又

三角亭中獨煎茶人言封閉縮如蝸直去難處下流地。圓轉何停峻阪沙有水有山常可月無冬無夏永觀花比年患眼偏塡白。藍紙粘窓同碧紗。

壽碣銘

奥田士亨字嘉甫號蘭江亭。曰三角南山古稀所賜號也。小字宗四。宜休大入季。為伯龍溪嗣。服嫂堀口氏喪。十四遊學宇治。十九上京師事東涯先生十一年。廿二命校名物六帖。深吐師意。爾後編述必專任焉。廿九擢津府賜十口俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史半年。句豆竣功。癸未領百廿石。庚寅東下留柵。

邸九月。壬辰班掌鎖右廂學術也。甲午轉中廳賞舊書萬卷與家丁卅負器械也。丙申告老尚賜退俸十日隔日入侍或至夜分所賜書畫扇巾衣裳至襦帶山積不止等身矣。今茲己亥不幸會嫡士元喪。忝蒙丙公存問。仍有花餐賜。臣庚之家未之前聞也。時歲七十七。元嬪土井氏二男。次曰正準。冒岡部三女長適士弘。餘夭後嬪細江氏。一男曰叙典。冒吉村。內外孫十四人。帰孫七人。五十年來門生踰八百。今存百數。身後恐或溢美。自撰壽碣銘曰。

起于田間　升中廳直　何以得之　稽古之力

加々美橘嶋

加々美氏治守保光章。橘嶋与[illegible]。甲斐國山梨郡山王社

現の神祇をくゝりて沼素尊を恭敬し、博学多聞、国学は
さゝ。儒仏道教、青律方術、天学暦算等の書をも読れ
ず。和歌は凡作者の義ふかく、文学は三宅尚斎、中村
初学教授して、ゆゑ。保香とくゆらし。その光とたのみまと
ゝし。学成て後、清国九十余門を拝び者多し。神学
指要とあらし学を行ふ。八十四にて脱せば。学者七十四にて辛苦
辛生一言と申すもれ皆服をげるいるし。ちふ話一二條と学て
その人となりを。けり山は山路嶮岨といふもれ有り。甲斐八
幡宮。後五郎は佛徳と号。なるにそなる術
ゝ。国学は解ゝとゝられ。神を形ゝ学ぶ学て
世義とはれ外の教ゝとうけ。廳へ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
ゝて[illegible]国ゝと。あゝの考酒者と爵ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ。酒国ゝは[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ。又ゝ[illegible]ゝ。ゝ何ゝ[illegible]ゝ。学ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ。[illegible]

[illegible]。[illegible]。[illegible]。

一祖父一にんのくせに廉うて家をしく。書のこと。
凡世のくまと都より見とてしば浪人ありし
越前丸岡侯ゆへなり。仕者とはうかされるまで。国詳しう
けど。仕者ゆへ。一つのおづれとたるまじ。何
役の縁と元ゆへ。ちうれもかつて勤仕の男をみたべ。今
浪人ありむで。ちうれまくと。ちうて丸岡よりぬ。もちろん
儒者は男ちうんちうわかりくいもの岡のしてあり。ちうれども
なもはけしいとなくみくちうれ。今わかりて侯樂一に
儒書の講侯と命じ。ゆへ。ゆへ。樂一と語りて
ちうれ縁ちうれて不無。命に無をんとんされど聞ざの子ちうり
ゆへ今にたしいで。せんとちうれちうれ安ふふて。仕者の士
ちうり佩刀と帯りちうり不羈ちうて洒落ちうとまぐれ

ちうり。ちうちうり俳諧とゆへちうて人ちうちうぶちうれのちうり
著ちうり。ちうじせしの奥のちうと行ちうもちうり。俳諧ち
ちうもちうし浪の嬉美仕師。伊勢乃桐雨しいちうちうた。樂一ぶ
ちうとちうしちうちうふ丸岡のちうンちうちうちう

百丹・濱雨

百丹・濱雨

百丹・濱雨の人々、そこへ家内の豪富為
爲へ、つぐ〳〵あきとして、ちろ〳〵いたりて、なすこと、歳暮の
いけ〳〵富べし。彼れども、ちぶだうねべ及ぬ〳〵と求んとす。
我れ、ろ、名山彼頃と、ろ、れ、しんぶ、ろ、ぐいすして、金三十両
と、ぶ、へ、ぶ、は、薩摩日向、ふ、は、奥州かど、乃、ろ、と、ぶ、と、彩色
ち、れ、ま、ち、い、ぶ、も、稿と、脱ぶ、ぶ、の、中、ふ、寺、ろ、ぶ、ぶ、富士
ふ、の、ぶ、ぶ、ぶ、と、ぶ、ぶ、ぶ

間過よられば幸ふなと伸べく。けふ家と一宗賞ふ。甚さくて
へかりまきわかぐの京りと春くしそれば。急拵弁慶ふまり。
もかうぐやめ。ぶよい弁の毒くとたうそう。又嬉所とそこ
そとなくひろよ。名のおそさにと小家一つ人由。たりぐれく
こりんとまるに。名ふうしてろ入ま。思性してそふ行乃
きろる。手拵よられ付くあなれば。不思議よ美ものむのふ乃
地よいこりぬ。ちくかれ一ゆ歩にへく。ふうくのくとかくり。
を同よくぐ。ろよ。おくい本頭ふがりも毎ふかくあくぬまを。
先今ぬい休こうへ。ゆる楽心そんく。粥ふれ焼てうくへさ
まぐのあくりするはいぐ。けさいめぐくく甘家の海ぐりかくさ
ゆくよ。ちてけくけぐくりめ。ちくえれくく海ぐれとこべくを
さうふかうくなれくいふ。彼嶽山よ甘嶽ゆりくぎと。ら

ふとまれくもゆるなれば。道士と仙境といふもむまなれば
えくしそれより楽心とわくく嶺とゆりあくなん。西極ろ人歩
ゆぐ嶽乃天の逆浄をうえく。こ度ぐくのぐりくぐ。硫黄
乃ふまれて不落くてゆくぐくいふ。ぐりんは白くりりふ学のろと
いくくるく。実て連鄙なれぐ。ちくと人の真るるのくく。滝
雨三個ろ事の題とりくに流ちくれぐくく行ぐ。ふふぐ
ゆくくくしい手。ゆくくよ学のまとともいふ人ゆるゆくさく此
巻の初くとぐ。ふくりめ醤ゆんれよゆるのよかとゆりくば
いうはとうくくゆくよ。見いくくいぐくくあゆ。時雨るゆさ
いうゆくくよ。ふいるゆの時て行とうくくてふくぐくく円へ
ふふいづ体ゆ山乃ふさ寺くとこくくるぐくく円へ
聞くぐ。ひか寺法ゆうれば時乃ぬくくくと

いと長顔にて。岡田の又いつぺい人にてありしが。その兄がよりこうべ止まりといひしが。ある日ふさらへとうくまりて祝ひしに。そうにて祝ひしに。義財と賞しとゝいひ。ものとあるを賞しむ。又その需に応じぱく！ものの祝ひと行ひて自ら祝ひしのと著せりしも祝ひこれと添削し。後ともかゝりおりしを老人まりしが。ものしの書碩乃義ふいまゝ。ゆりて天祝ひたり。一生風流をつくしたりしこと。老顔を返ゆるは侍と記せしこと。ものがたりあれも赤にぞ物ゆ。ものを逝けりも長生なり。

其湖庵社に

其湖庵社には生源俳諧をなせし句ともをまんなと

けりの退隠なる時人の詠ありしなり

くちなはれ人ゝ山もはるゝ郡

此句あるはねゝ山もてゝ言へり。雅俗開見の持ふ人ゝ談話せりしものなり。老後郷邑入名ふ。ものを古文書のものゝきと空し。又鳥人開しゝとゝ筆をよろせしつれと。後年ふて根来も強りしうへ。凡二百年ゝ来ゝ。相撲の人ものゝぬゝふゝる業ゝとうゝてゝもゝ。ハ十六ゝてしみのゝ名ゝ名の者ゝ入られ。

洲野瓢水

播磨加古郡別府村の人。洲野新ゝ逸。別駕ゝ月得ゝいゝ。学ゝ齊瓢水ハ俳諧ゝ好ゝ。

よ石和七殿ようにの歌富なれども遊蕩のた
めに費し後は貧窶よりぬ。中頃新敷ゆ
酒屋ありわが笑話多し。酒井侯初め眼鏡へ対と称し
るる法新ちが凡流と異なりて。領地を巡覧の
ときいでを宅小野とゆめ行つて。新もらひ永
さ[illegible]れど不興にて帰城しる事数。三百と称せしかが
いりにて[illegible]ふ[illegible]夜月ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]。頃磨の眺め
はりくて何ものなくしかりしいかつ迄村ふ川
の接を法ることを踏くしく義ることをあちの農
ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

[illegible]門の白[illegible]
建[illegible]の[illegible]背面の[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]
人乃[illegible]

七十六七ばかりの[illegible]

[illegible]

正固[illegible]森氏号寂[illegible]。本肥後国河[illegible]大宮司三家入
内門[illegible]森の[illegible]。紀伊国[illegible]
[illegible]葉[illegible]。[illegible]
[illegible]京師[illegible]
[illegible]浦[illegible]

[illegible]院[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

許多金及び本町の宅地跡千庵の組と称せられ
醫人なりとぞ。系く大己貴命乃子の
衰輪を賜へり。孫は眼病に進む。且和歌と嗜み
風雅に達せられ。某卿の傳奏にて自詠二十首と
なりしと。甚奇特なり。東蘭亭の号と称し
たりし書院乃名なり。元生源の業巻にの
なりしといへり。然れ不拘して志ある齋食に
持ちくまりとなりしかみ。乾の肉をもちい。教
せにおづるふとをせば。寛永餅の始へ勝平
教といふ薬を業して病者を拯ひ多く善業人の
にふれり。七旬有餘にして病み自死日と云り。
性能を有し端庭にして曲直。醫術の書は

家に傳へ。一生不れ乃人なれば家名を絶す
い一旦亦りてもいへども。次のとめたとびとなる。りり
の人乃書集ろうがもりく。こも中にはりとと巻ぐ
早春　まくれの雪まふ美州の生先人乃ふみ乃のだけ
乃花　はるくの此門をあるんむすべ水の花乃ちてる
山家方　ちといふ仏のあに法月の新えべ法乃井れち
物菓子と法乃の形もうえ原けるれ乃ふてけやと巣の色
不久道場　うるくれんの国とあるあて今法の旅乃とよとしれ
ようとは中ちいとうるしこうれ
ちもこふそひ

端文仲

武家伯壽

繻隆字文仲通名順脉。春荘と号す。書林なりしと。
隠係なる人にて詩を作て名あり。天明の人なりしとて
参考にのせ侯。もとより荘名付る事西北と情にて。この
潘名家なりて三ツ家にしめ。許北の北の井の前荘なりたのしみ。
義人集は家の図とうつしたるにしこれにかゝる
事は絶筆の前にうつされ

半開全盛驕春光。　日日帰家衣袖香。
酒館伽藍院綱　人情一月為花忙。

又

倫周平日惜芳菲。　帳苑前多友非。
醉後縦能紅照面。　時々作雪鬢邊飛。

六十人多年以人と情ゑ有たゝ。ゑと男て次其絶筆

詩藪曰

文仲戊申罹災。家産蕩尽。寓復得疾。其病中五
秋詩曰。閑接林鐘暑更猶。上蒸下湿瘧瘟并。蕃
閑芻具醫調護。棺後詩名天寵栄。老雀引雛窮
巷寂。新蛍逃月敗簾清。五更行雨交金吹。秋自
白川水北生。作此詩後遂不復起。終為絶筆。
先廬委燼費攸獰。　錙莫貸居貧病并。
一盎粮支百錢卜。　数篇詩敵五侯栄。
舟移夜壑命何促。　墓傍青山骨亦清。
得句猶思来質我。　毎逢風景感逾生。

上人未句自註曰。生毎得詩。或有推敲未穏者。輒
素謝之。余曰。某字可若称其意。別作一句。会堂
不置喪服于色。若不然。則死也不便堂也。不会
傲然擲記曰。斯字尚勝也。其真率若此。

中絶有若人乎。此事今尚絶来。千載中也

○九齡字伯壽号蓋山人。本姓の加藤。近江佐々木山
乃蔭佐々邑の人。詩をよくす。美くして志高
小洲よりも邑。家世に業を結び化邦に遊。後京師氏家
御医となる。毋方孫ふかくして。家に
絶御国に聲人多し。文学流の奇と云人。
伯壽に学ぶと教授し。
為邦乃行年。すべてちもつめも教学を入人
けんに集るもの。元三首たふ第く。竹軒逸民歌
且古詩と絶句とをよく。人と絶倒す。晩年に
は易陽明の学を信じ。京師中にて名とす
斗。久く病に臥す。惜むべし

此泗湖二首

萬頃煙波涵大清。琵琶何歳作湖名。園存石鹿皇
都跡。藩壮金龜侯國城。諸島争奇盤上峙。千山浸
秀鏡中平。滔滔八百余川水。向此朝宗日夜聲。

西北名山數十峰。巍然紫翠画中濃。風前唳鳳笙
洲竹。磯上卧龍蓉館松。天接中流涵日月。地開東
海吐芙蓉。丈夫不識名區壮。宇宙何由披曠胷。

寄東滴禅師

高僧丈室倚岩巒。千仞猿聲凌碧霄。講法臺前馴
猛虎。参禅會上斬兒猫。寒溪明月敲氷汲。暮嶺白
雲分雪樵。火抱煙霞遊社。思師永夜夢魂遥。

明妃曲

憶帳秋風憶漢都君王命美和單于此身空解誤明鏡恨在娥眉不画圖。

石二ヶ所ハ寺乃ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

せんかを再建して風流とはくれたりしの繪詞伝を著してちかれ什あり。そ写を所むることを願うてぞふ芭蕉と建てそ旧址とそしるをば。
そ後の称さる業多し。天明の中ばかりに信濃の人乃淵乃空如ょ。泊庵といふものとたて。同志の人とのはぐくぶ者と称ぶ料しんをたいくるを洛中大火乃ほぞらとりて信濃の人にられまとやがて伯義にられが
門ちの興もるまでそ。癩病のみしやまつりはこぶ
て後帰白院よりくり白仏湯とした。此泊庵乃況い拙なる
遊中も老著のもの。なりてのちて六ちくの係況を
今尾を掘く。そ後の後白仏会又寄たまづの京乃人書
ぶもれあるとのもとばらふ贅せんぞ。ぞくく病してつしふ。
そ年孤月まるの先ぶうくれぬる。歌い六十有ぞうり

泊菴記

幻阿法師不慕榮利。不驚寵辱。所談者清玄。所詠者俳諧。性好山水。探名區攬勝槩。足跡幾極四海之濱。而一寓諸諷詠焉。其居于岡崎也。並衛巷背山野。所為聘心目而寂遊暢。乃憑神足之通也。近更上一宅。乃東距數百歩。為古法勝寺跡。自結團瓢。俗白河水帶其門。横畧徇入之。只尺間頓隔凡境。南面華頂山。紫翠聳出列松之際。東則南禪之樓禪林之殿。正亦與軒楹相當。時則作鐘磬之響。如意瓜生諸峰邐迤而北至此處。更開一窓受之。乃黒谷翁欝擁其前。使四明逈以臨焉。至於雪月花樹為之裝飾。則四時變

朝暮換。不可勝狀。蕞爾一圍斯席。僅函丈而氣象百千盡在几席間。不亦奇乎。法師既多四方交遊。戶外之屨未免雜遝。則今之所營唯同調者而已。以下稱云。乃謁余謂曰。某老矣。不復從運東西。此其臥而遊之乎。願某所宗獻穢。而欣淨是誠何心哉。師其忖度而命之。余曰。有是哉。其惟泊乎。夫泊也者寄身一葦之上下無所定。四維無所亞。必也知其所止而後止焉。然目不得不視。耳不得不聽。彼寒山之鐘。江楓之火。亦無所待而有所待者也。經不言乎。見聞如幻翳三界如旅泊。故見而翳之是謂不見之見。聞而幻之是謂不聞之聞。是界出界。方便之門其在茲與。君豈所待是舍諸。且夫華頂禪林黑谷者皆君所宗宗西也。此所以美墻于耳焉乎。昔者吾至覺国師居切之三浦。名庵曰泊船。聞芭蕉翁寓武之深川亦有泊船之堂。是猶有繫乎水与船者也。今法師之營非水而山。不船而泊。泊之時義於是遠矣哉。法師同。義哉。諸紀斯言勿忘

天明丁未十一月　　淡海竺常撰

泊菴本為朋籍而設。既而汉渭樹下塚間非敢所望。降跡則一把之茅猶為有餘。豈可有長物乎。遂乃指之為泊。名實念副焉耶。大典禪師所命之為得其實矣。唐詩有之。猿啼一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法

師之視泊菴殆如斯夫此之平泉之石賢愚相距何如也因記之以附前記之後

寛政癸丑孟冬　六如杜多慈周識

一　古谷久兵衛

古谷久兵衛は仙台國三重郡松本村乃農夫なり。四ツ屋と云もしらるにぬるて所史軍記の伝と云。一ツ巻にて記得し給ふ事なれど。村中の集會ごとに彼とうつんしてとふものもわれば。古の事実と流して手書よ射とるごとし。此村四日市澤より過られ旅人の行倒とも與ることあれば僕しわれぐりて接待する士人なれど。そのれ藩中にあることなれば大小異端ありとぞ。されば彼て此物の歴史及び万執筆なれども巻く時記して沙汰元来の人のことも今ることなく伝ることなれば

ゆえに行ひ白孤の赤よ拙しくるもまも仮法なり。若不面部異史又古谷此村なり。此村は仙台ふけと廻りて。古の比況古と云ふ慶長ならるる及土産のふとも考案して深きりたれば古の国ゴ年法と場ひよ貴ー行ふ。ふと苗邸もちぐうまねば古谷の邸も君長の物ならるなりふ。やはり久兵衛のみ。ぬとれんー古と云ふなりてくの名付しやんぷの士ものもとと記して詩奇とーセ。ゆえく安くなり。七十の時とその人作りて寺碑と建七十ニ年ー壬寅ーの秋とそ。又国。此老拙出る孫の古国拙が伝郎の名高国高の杜ーの名高の伝ーなるなるふるるぬ。二ツの切ーこーとるん。彼古谷此村なるもぬ。此国ふりて大林文後此小ちの国小法ぬ。ゆえ此村古の実ふ文ー教使ー高の名ーよりぬ。ゆえ此古の実ふ文ー教使ー高の名ーよりて此古国古ーの名ぬれも記されるー。

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan